

# タイにおける HIV/AIDS 対策において当事者の主体性を重視した成功モデルの検証 —MSM による性教育を中心に—

○長澤貴子\* (指導教員 藤屋リカ\*\*)

\*慶應義塾大学 看護医療学部 4年 (2017年3月卒業予定)

\*\*慶應義塾大学 看護医療学部

\*i14503tn@sfc.keio.ac.jp, \*\*rfujiya@sfc.keio.ac.jp

キーワード: HIV/AIDS、包括的プライマリヘルスケア、主体性、MSM、well-being

## 1 はじめに

### 1.1 SDGs における国際保健分野の目標

2015年に終了した国連ミレニアム開発目標(MDGs)では、国際保健分野において目標が達成された側面もある一方で課題も明らかになった。つまり、個別課題を数値目標で達成する手法と、うつ病や自殺、事故、慢性疾患などが具体的目標に反映されなかったことである。

このような反省をふまえ、次の2030年に向けて持続可能な開発目標(SDGs)では、途上国と先進国という枠組みを超えて、誰一人として置き去りにせず個人健康問題が解決され、すべての人々が幸福に生活できるようにという願いが込められている。これを反映して、SDGsの目標3に保健分野の目標として、「Ensure healthy lives and promote well-being for all at all ages(あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福利を促進する)」が掲げられている。

このwell-beingは「福祉」や「福利」とも訳されるが、人々が幸福に暮らせるように、「しあわせ」や「ゆたかさ」を意味する言葉であり、すべての人々が最低限の幸福を享受する権利をもち、社会的援助を提供するという理念を示すものである。このwell-beingが目標に掲げられた意味は、まさに一人ひとりの人間の健康と幸福を世界共通課題として追求していくという強い決意が含まれている。

国際保健における今後の課題としては、それまでの数値だけで目標を達成するやり方ではなく、保健問題の当事者である「一人の人間」を常に中心に置き、疾病中心ではなく、トータルに一人の人間の幸福を追求していくことである。そのためには、保健問題に直面する人間の主体的な行動を支えることができるように、住民、コミュニティ自らが保健と「つながる」ことができ、包括的プライマリヘルスケアの取り組みの担い手となれるように保健システムを再構築していく必要がある。

### 1.2 包括的プライマリヘルスケアとは

包括的プライマリヘルスケアとは、すべての人にとって健康を、基本的な人権として認め、その達成

過程において、住民の主体的な参加や自己決定権を保障する理念であり、方法・アプローチでもあるといえる。ただ疾病をコントロールするだけでなく、人間を社会的存在と捉えた健康を目指すことであり、結果よりもプロセスを重視する考え方である。

住民やコミュニティを主体としたボトムアップ型アプローチを採用し、地域の伝統や知恵などの強みやアセットを活かし、住民主体の自律的な活動と社会的弱者をエンパワーするという長所をもつ一方で、理想的すぎる、達成を評価しにくいといった短所も指摘されている。

2008年のWHOの世界保健報告では、「いまこそプライマリヘルスケア Now more than ever」というタイトルで、プライマリヘルスケアの理念が再評価された。1978年に、国際保健政策の要としてアルマ・アタ宣言で採択された「すべての人々に健康を Health For All」を実現するためには、個人とそれを含む市民社会が重要なアクターであり、住民参加が主体となる包括的プライマリヘルスケアの重要性が再認識されるのは当然のことといえる。

### 1.3 タイにおける HIV/AIDS の現状

2014年のデータでは、1年間に HIV に新たに感染した人は7,816人、AIDS 関連死は20,492人、そして HIV 陽性者は全体で445,504人である。抗レトロウイルス薬による治療が導入されてからは、AIDS で死亡する人は大幅に減少し、2005年～2013年の間に56%もAIDS 関連死を防ぐことができたという報告もある。

しかし、若年層やMSM(Men who have Sex with Men)などハイリスク集団と呼ばれる人々の感染率は依然として高く、予防政策が浸透していない。新たに感染する成人の90%は無防備な性交渉によるものとされており、また、新たに感染する人のうち、41%はMSMや男性セックスワーカー、トランスジェンダーであると報告されている。これは、彼らが複数のパートナーと性交渉をしたり、ハイリスクな性行動やコンドームを使用しないことなどが要因として挙げられる。

また、タイでは若年層の妊娠も大きな問題となっ

ている。15歳～19歳の妊娠はアジアで最も高く、2012年には、20歳以下の平均355人が毎日出産した計算になり最年少は12歳であった。2000年～2012年に若年層の出産が2倍に増加した5県を対象に、400人の若年リーダーを育成するキャンペーンがタイ王室直轄のNGOであるCCF (Community Children Foundation) によって現在行われている。CCFの活動は、問題解決にあたって、当事者である若者自身が主要なアクターとなり、その活動を教員、家庭、コミュニティがサポートすることを特徴としている。

## 2 研究目的

タイにおけるHIV/AIDS政策において、当事者であるMSMと若年層が主体的に活動する様子を参与観察することで、国際保健が課題として挙げる「誰一人として置き去りにせず」に健康問題を一人ひとりの問題として捉え、当事者が主体となる意義と、すべての人々にとってのwell-beingとは何かを包括的プライマリヘルスケアの観点から明らかにする。

## 3 研究対象と方法

研究期間：2016年9月18日～28日

研究場所：タイ王国ウボンラーチャターニー県  
ケマラート郡

研修受け入れ団体と活動内容：

Health And Share Foundation (以下、HSF)

この団体は、地域に生活する人々の健康を守るために、地域にある資源を最大限活用しながら、地域住民の参加を主体とする社会支援活動を行っている。

主な活動内容は、①HIV陽性者のリーダー育成と、家庭訪問を含めたHIV陽性者の支援全般をサポート②MSM (Men who have Sex with Men) のHIV予防のためのセルフグループ育成と活動支援③問題を抱える子どもと家族を支援するために、Community Action Groupの活動の立ち上げをサポート④若者への性教育活動である。

なおこの団体は、2016年3月に、「特定非営利活動法人シェア＝国際保健協力市民の会 (本部・東京)」より活動を引き継いだ。シェアは、タイ東北部で26年前に住民参加を主体とする下痢予防活動を開始し、その後、HIV陽性当事者と共にケアと予防啓発活動を行ってきた。

研究方法：

HSFの事務所に9日間滞在し、毎日活動に同行し参与観察とインタビュー調査を行った。今回の研究目的と照らし合わせ、対象となる事例の参与観察を以下のMSM (Men who have Sex with Men) の活動に絞った。

①近隣の3校から選抜された65人の児童生徒 (小学5年～中学3年) に対する性教育の合宿 (2泊3日) に参加。生徒たちは合宿後に各学校やコミュニティでリーダーとして性教育活動を行うことになっている。

日時：9月23日～25日 6時～21時

場所：Baansuan Khunta Golf & Resort Hotel

主催者：CCF (Community Children Foundation) の職員3名、HSF4名 (MSM2名を含む)

参加者：近隣3校の65人の児童生徒 (小学5年～中学3年まで男女同数)、教師6名

②HSF事務局長にインタビュー調査

## 4 結果

### 4.1 MSMを含む指導者側の伝えなかったこと

事務局長へのインタビューから、若年層への性教育については、政府は予防より治療に重点を置いた資金配分をしているが、HIVに新たに感染する人が若年者にも多いことからこの層への対策が必要であることがわかった。若年層は、Sexの話やコンドーム使用に対して否定的な態度が見られ、性交渉においても相手に断ることができずにいる。また、妊娠した場合にもその後の人生に影響を与えることをよく理解していないなどの脆弱性があることから早期の性教育は有益であるとのことであった。

具体的にグループワークすることで、参加者の意見を聞きながら自分の考えを深めたり、また性に関して正しい知識を得ることで、自分の体を守り健康に生活できることの重要性を理解してもらうように工夫されたプログラムで構成されていた。

例えば、模造紙に1本の線を引き、その上に10代から80代までの区分に分け、生物学的な発達段階と学習によって変えることのできる行動とに分けて、そのライン上にプロットしていく作業があった。この作業を通して、発達段階の中で10代が最も身体的な変化がみられるだけではなく、性的行動に対しても興味関心が出てくることを理解してもらうことを目的としていた。

また、男女の体の模式図に特徴を書き込むゲームや、ティーンエイジの好きなことや問題点、性行為について思うことなどをグループ毎に模造紙に書くワークや、コンドームの使い方の実践もあり、女性用コンドームについても具体的な装着方法を紹介していた。男女に分かれて体の違いについて学ぶワークでは、「なぜ陰毛が生えるのか」、「なぜ勃起するのか」、「1回でも性交渉すると妊娠するのか」など疑問も多く挙がり、生徒たちが性について疑問に思ったことを率直に質問し、その疑問を解消することで性について正確な知識を得ることの重要性を強調していた。

## 4.2 生徒が性教育を通して学んだこと

初めは緊張していた生徒たちであったが、早朝6時から夜9時までずっと一緒にレクリエーションなどを通して団結を図ることで次第に打ち解け合っていた。グループごとにティーンエイジの問題点や性行為について思うことをまとめたり、体についての講義を通して次第に学ぶことへの意欲を示した。最終日には、今後、学校やコミュニティでリーダーとして活動するための実施計画書を立案するにあたり、模造紙に目的や対象者、期間、場所、方法、予算まで具体的に計画を作成した。

生徒たちは、この一連のグループワークを通して次第に自信を深めていった。またMSMがファシリテーターを務めたことで、最初は戸惑いながら好奇の目で見ていた生徒たちもMSMたちと一緒に活動を共にするうちに、偏見や好奇の対象としではなく一人の人間として接することができた。その結果、最後の解散式ではお互いを労いながら抱き合い、別れを惜しんでいた。

生徒たちは、自分たちの年代が最も性に対して脆弱であることを学び、早期妊娠やHIV感染を含む性感染症を予防する重要性を学習したことで、予防することで自分たちが健康に生活することができ、それが他者にも良い影響を与えることを理解することができた。

そして、2泊3日の集中的な合宿を通して自信を深め、リーダーとして他者へ伝える役割を担う責任感をもつことができた。最終日には合宿に対する評価を行ったが、大変満足であったとする生徒がほとんどであった。

## 4.3 性教育において重視されていたこと

ウボンラーチャターニー県では若年層の妊娠が大きな問題となっていることから早い段階で性教育を行うことで知識を習得し、自分たちの健康を守ることの大切さを教えることを重要視している。

また、MSMの人たちをファシリテーターとして採用することで、生徒たちが偏見を持たずに、そして性について楽しく記憶に残るようなプログラム構成に重点を置いていた。MSMの人たちは、感受性が強く脆弱な面も持ち合わせているが、ストレートに感情を表現し、言葉もストレートに使うために、医療者や教員とは異なるインパクトがあると事務局長も話していた。また、彼らが活動を通して自分に自信が持て self-esteem が高まった人もいるそうである。

そして、生徒たちがチームワークで活動を円滑に行えるようにレクリエーションに多くの時間をとることで、気分転換と団結力を高めていた。最終日には、モーラムという腰を激しく動かすダンスで盛り上がり、楽しい時間を皆で共有することができた。そして、リーダーとして学校やコミュニティで性教育活動を行うことが求められているために、具体的

な実現性のある計画を立案することが求められるだけでなく、活動の予算が主催の団体から拠出されるために、より詳細な案を計画することが求められ、生徒たちは厳しいながらもしっかり協力し合いながら取り組んでいた。

## 5 考察

### 5.1 MSMが性教育を行う意義について

生徒たちは2泊3日の長時間集中的に性教育について講義を受けることができたのは、MSMの人たちがエンターテインメントの要素を取り入れて楽しい雰囲気づくりをしながら進行していったからである。事務局長の話にもあったように、彼らは感情をストレートに表現し、言葉も直接的表現が多いことから教師や医療者が教育するよりも明確なメッセージを生徒たちに伝えることができる。

また机上の学習に留まらず、65人で合宿生活をしながら学んだという事実が楽しい思い出として記憶に残るという利点もある。また、生徒たちは最初はMSMの人たちを好奇の目で見ていたような印象を得たが、次第に打ち解け合い最後には別れを惜しむまでになっていた。このことは、MSMというHIV/AIDS対策ではハイリスク集団としてひとくくりにされている人たちにも、それぞれ個性があり、一人の人間として見ることもできたということであり、感受性豊かな若年層の体験としてとても有益であると考えられる。生徒たちはこの後、それぞれの学校やコミュニティで性教育を実際に行うリーダーとなるために、ここでMSMと一緒に生活した経験は偏見というキーワードが彼らの中から消えることが期待される。生徒たちが偏見をもたずにMSMのことを語ることで、それを聞いた周囲への波及効果も期待される。

またMSMにとっても自分たちが主体的に教育活動を行うことで、HIV感染や早期妊娠を予防する保健活動に参加しているという自信につながる。また教えるためには自分たちも正しい知識を学ばなければならない、そのように習得された知識は他のMSMにも伝わり波及効果が生まれ、性感染症につながるハイリスクな行動の予防にもつながる。

もともと、MSMは当事者同士のグループ活動が盛んでもあり、コミュニティをベースにした自助活動が米国やペルー、中国など世界中で成功している例も多い。しかし、MSMが生徒に対して性教育を行う例は検索したかぎり論文では見つからなかった。このように、若年層とMSMという保健政策においてターゲットとなる集団が共に対象者としてではなく、自らがリーダーとなって性感染症や早期妊娠予防のための行動変容を促す活動を行うことは、包括的プライマリヘルスケアの観点からも当事者の主体性が発揮され、それが人々の健康を向上させる Well-being につながると考えられる。

## 5.2 若年層への教育

若年層は、性に関する知識不足と精神的脆弱性から自分の健康を守る方法を知らず、また人生に影響を与えることをよく理解していないなどの脆弱性があることから早期からの性教育は重要であると考えられる。身体的・精神的発達以前にも増して早発になっていることから、生徒たちが自分たちの体について素朴で素直な疑問を解消する場が必要である。家庭や学校で話しにくいことも、第三者が介入することで率直に思いを打ち明けられることもできる。実際、生徒たちは体の仕組みやコンドームの使い方について熱心に学んでいたことから、身体的発達のスピードに性教育が追いつく必要性があることが十分に理解できる。この年代は学校という集団生活で過ごすことが多いため、一度に多くの生徒に教育することで波及効果が期待できるという利点もある。

また、グループに分かれ参加者同士で考えることにより、相手の意見を聞き、間違った知識をもっていたことに気づくこともでき、お互いに学び合える場となる。また、グループワークが円滑に行えるように、気楽に意見が言えるような雰囲気作りや集中力が持続できるように、合間に体を動かすゲームなどレクリエーションを取り入れることで記憶に定着しやすい。

日本の場合は、文部科学白書によると、学校における性に関する指導を進めるに当たっては、児童生徒の発達段階に沿った時期と内容で実施すること、保護者や地域の理解を得ながら進めること、個々の教員がそれぞれの判断で進めるのではなく、学校全体で共通理解を得て実施することなど留意する必要があると記載されている。しかし、学校によりばらつきがある。この背景には、HIVの感染経路は性行為による感染が最も多く、感染予防の重要性を伝えるために、性行為やコンドームの説明を避けるわけにはいかないという理由がある。しかし、「生徒の発達段階に沿った時期や内容」という表現があいまいであることから、中・高校生には早すぎる、性行動を助長する危険性があるという意見があったりして、性やHIV/AIDS教育が教育現場で積極的に行われていない現状がある。

国により状況が異なるので一概にどちらが良い悪いと決めることはできないが、早期の段階から学校や家庭以外でも性教育を提供できる場は必要なのではないかと考えられる。この場合にNGOの役割は大きい。タイでは学校の性・HIV/AIDS教育のカリキュラム作りのプロセスに、NGOも参加できたことから、現場をよく知っているNGOの声も反映された。それ以降、教科書にもHIV/AIDSのことを詳しく掲載できるようになったり、授業も参加型で行われるようになったりと、大きく授業内容にも変化が起きたという。

以上、MSMが性教育を行う意義と若年層への教

育について考察を行ったが、包括的プライマリヘルスケアの観点から考察すると以下のことが言える。

## 5.3 Well-beingの視点と包括的プライマリヘルスケア

若年層への性教育は、未来の財産である若者が自分たちの健康に関心を持ち他者への影響も考慮しながら予防知識を習得する点でwell-beingの担保になる。well-beingを促進するためにMSMたちが教育することの意味について考えたとき、生徒たちが楽しく学ぶという視点も重要である。持ち前のサービス精神で人々を楽しませてくれるMSMが性教育を行う意義は、生徒たちが少数派の人々に偏見を抱かなくなるばかりではなく、楽しい時間を共有することで記憶として定着することを容易にすることである。生徒だけではなく同じ時間を共有したMSMや教員にとってもwell-beingが満たされていたと考えられる。WHOによって開発されたwell-beingを測定する尺度の5つの質問項目のなかには、「明るく、楽しい気分で過ごした」「日常生活の中に、興味のあることがたくさんあった」など、まさに性教育で体験したことと合致する内容がある。

well-beingを享受し、自分たちの健康を守りながら生活をより豊かなものにするために、主体的に人々が楽しく学ぶ場が増えることは、「一人の人間」を常に中心に置き、疾病中心ではなく、トータルに一人の人間の幸福を追求していくことにもなり、包括的プライマリヘルスケアの精神につながるものであると考えられる。

## 6 おわりに

以上のように、HIV/AIDS対策においてターゲットとなるはずの若年層とMSMの両者自らが、主体的に自分たちの健康問題について取り組むことで、良い相乗効果が生まれることがわかった。また楽しく記憶に残る性教育を通してwell-beingが促進され、一人ひとりの健康を考えるうえでも保健政策にwell-beingの視点が重要な要素であることが示唆された。これをタイの一地域における一成功事例として終わらせるのではなく、タイの中で、また、日本を含めた他の国々にも、その地域に受け入れられる形で広げていくことが、今後必要とされているだろう。